

地域住民の意識変容

—— 滋賀県愛東町，1985年と95年 ——

いし はら とよ み
石 原 豊 美

1. はじめに
2. 農民意識の研究動向
 - (1) 伝統的家意識と村意識
 - (2) 私化と個人化

3. 地域住民の意識変容
 - (1) 調査の概要
 - (2) 10年間の変化
 - (3) 世代と意識，職業と意識
4. むすび

1. はじめに

本稿の目的は，滋賀県下の一農村地域の事例にもとづいて住民意識の特徴と農民意識研究の今日的課題について検討することにある。

本稿で主な検討の対象とするのは，1985年と95年に滋賀県愛東町において実施した住民意識調査である。1985年の調査は，農村地域において住民の社会参加意識がどのように醸成されているか，またその担い手はどのような層であるのか，農村地域住民による社会参加活動の展開がどのような可能性をもつてなされるのかといった問題意識の下に行ったものであり，結果は次のように要約される。すなわち，社会参加意識の保有主体について，①主体的伝統型社会参加層，②同調的伝統型社会参加層，③中間的非伝統層，④孤立的非伝統層，および⑤中間層の5つの類型化がなされた。また，精神的価値を重視し，社会貢献志向によって特徴づけられる生活価値観をもつことと，社会参加意識が相関していることが示された。加えて，普遍主義的価値観をもつ社会参加層も把握された⁽¹⁾。

この調査を含め，10年を経過して1995年に行った2度目の意識調査の結果とあわせ

て，兼業化と混住化の進んだ農村社会における地域住民の意識の特徴について検討すること，そしてその上で，農民意識研究の今日的課題が何であるかについて小括することを，本稿の目的とする。

ただし，それに先立って，(農民)意識研究の動向を簡潔にレビューしておきたい。日本の農民意識研究は，1960年代に隆盛をみる程度で，決して主要な研究領域を形成したこともなければ固有の研究の潮流を形成しているわけでもない⁽²⁾。本稿では若干射程を広げ，昭和初期の研究例を含めて農民意識がどのようなものとして把握されてきたかについて概観する。すなわち，まず中心的な2つの概念——家意識と村意識——についての要約的検討を，代表的な理論に依拠して行う⁽³⁾。また，意識の研究において1970年代より主要な意識変化の1つの方向性として指摘され，なお重視されている私化の傾向について検討する。

注(1) 東・川端〔3〕を参照。

(2) 戦後日本の農民意識の研究を，細谷が有益な論文によって要約している。細谷〔8〕。

(3) 福武〔14〕，鈴木〔22〕など。

2. 農民意識の研究動向

(1) 伝統的家意識と村意識

戦後の福武らの研究によって、ヤヌスにたとえられたことによって知られている日本の農民意識⁽¹⁾について、時期を遡って別の研究がどのように扱っているかをみることから始める。

すなわち、井森陸平によれば、「都会人」と区別される農村住民の社会心理的特性が、集合的特質としての「農民心理 (rural mind)」あるいは「農民態度 (rural attitude)」として概念化されている。特に、後者は、「社会的諸事情の許に於いて独特な仕方では反応する田舎人の素質」を意味する。そして、これの形成が、居住地の選択を伴う淘汰作用——田舎型人間の着実性、勤勉と安全、安定に関する強い欲求を生じさせる——、農村の孤立、および農村の家庭本位を原因としてなされたなどの指摘がなされている⁽²⁾。

ところで、福武氏が戦前の農民意識の原型として提起しているのは、「家」と「村」のなかに埋没して人間的自我の充足が抑圧されていた意識形態である。農民たちは、かたく「家」に捉えられる。すなわち、幼少から家本位の意識を強く植え付けられ、家における位座に分を守ることを強く強制される。家族主義的イデオロギーによって、人間的な意識が摘み取られさえる⁽³⁾。

もともと、農家の家族生活は、やや異なる性格を有するものである。すなわち、「家」の和が、成員が分に応じた行動様式を守ることによって支えられており、自我が育たなかったため、個人の抑圧としては受け止められておらなかった⁽⁴⁾。家が村の階層的序列の中に位置づけることは成員の意識と行動様式を強く方向づけた。

が、村意識についての明確な規定はない。成員と村の関係について、鈴木が次のように

述べておる。すなわち、「村は一定地域内の住民がその共有する個性的な社会意識内容によって営む社会意識の自足的・統一的作用である。」⁽⁵⁾時間的な流れをなしている村の全貌は一つの精神の歴史または一組の意味体系の史的展開である。「個人が集まって村をつくるに非ず村は個人より先に存し個人より後まで残り、個人は村のうちに産み落され、村の生命の分有者として活動し、村の生命、村の意志を次代に伝えゆく一つのエイゼントとして存する。」⁽⁶⁾

鈴木 of 自然村のモデルは、明治以前の村であり、しかしその後も変質することのない村の、個々の成員および集団に対する超越性を、統一的意志（「村の意志」）の存続と関連づけて捉え、この意識を宿す主体を「村」として規定している。村意識については示されておらず、このようなものとしての村は、個人の意識からアプローチすることを妥当としない性格のものである。

むしろ、福武に戻ろう。すなわち、氏によれば、「家や村のなかに埋没した個人」としての農民は、内面的良心や合理的判断が行動の基準とはならず、慣習の優位や権威への服従や大勢順応主義を特徴とする⁽⁷⁾。

そして、しかしこのような特徴をもつものとしての農民意識は、大きく捉えて戦後の2つの契機によって変容する。1つは、農地改革による。これによって、村の中の身分階層序列が崩壊し、家意識の存続の根拠が希薄化した。「家観念」が弱化し、今日、農家の若い世代は「家」のために個人的要求を抛棄することを肯んじなくなった。⁽⁸⁾もう1つは、兼業化の進展による。これにより、「家長」は家の外で働く子弟の統制ができなくなり、また、成員が個人として所得を得ようになり、農民たちの家意識に変容がもたらされる⁽⁹⁾。

このような変化をたどった結果として、農民において新しい意識と古い意識が混在している点に着目すべきであり、またそうした実

態を捉えるにあたって、階層差と関連しながら世代差が重く捉えられるべきであると、氏は主張している⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。

(2) 私化と個人化

伝統的意識の変容過程に着目するにあたり、家意識を中心とする原型的な農民意識からの脱却がいかなるものかについて問われなければならない。すなわち、これは基本的にはそれまで家（や村）に埋没していた農民意識の中で、個人的な意識が萌芽してくる過程として把握されてよいものである。ここでは、社会意識の研究が扱ってきた私化や個人化の現象に照らすことにする。またそれに先立って個人主義との相違を明確にしておこう。

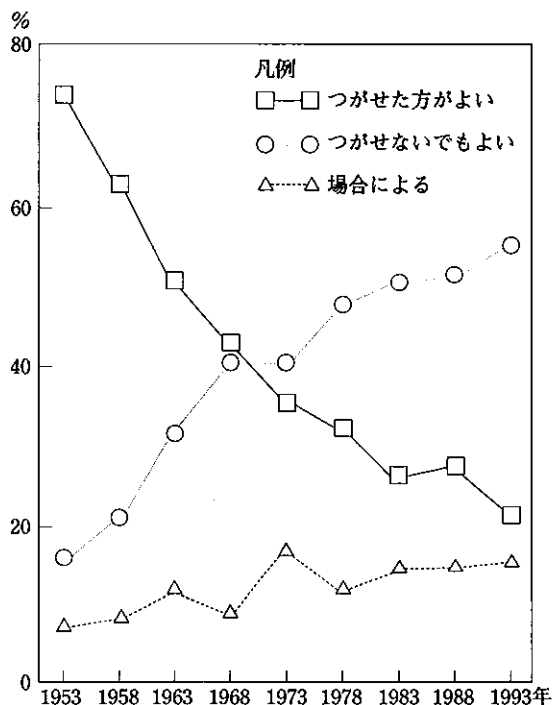
個人主義は、ルークスに従えば次のような諸観念を指す。すなわち、a. 個々の人間存在の、至高の、また本質的な価値、すなわち尊厳 (dignity), b. 自律性 (autonomy) あるいは自己指向 (self-direction) すなわち、個人の思想や行為は自らの決定によるとする観念、c. プライバシー (privacy) すなわち個人が他人によって干渉されない、あるいはされるべきでない領域という観念、d. 個人と社会の関係によって反社会的であったり超社会的であったり社会的とされる、自己発達 (self-development) の観念、および e. 個人は利害、欲求、目的、要求などをもった所与のものであり、社会や国家は諸個人の要求に応じている一連の社会制度であるという考え方、である⁽¹³⁾。

しかし個人主義は、日本の土壤に根ざすものではない。戦前の日本について集団主義的な価値観の支配性がしばしば指摘されており、家族中心主義は、この重要な構成要素の一つであった。戦後は個人主義が文化的に輸入されたけれども、これはタチマエとしての価値観にすぎず、戦後生まれの世代にみられるとされがちな個人主義的な傾向も「個別化」の一表象にすぎないことが主張されてい

る⁽¹⁴⁾。

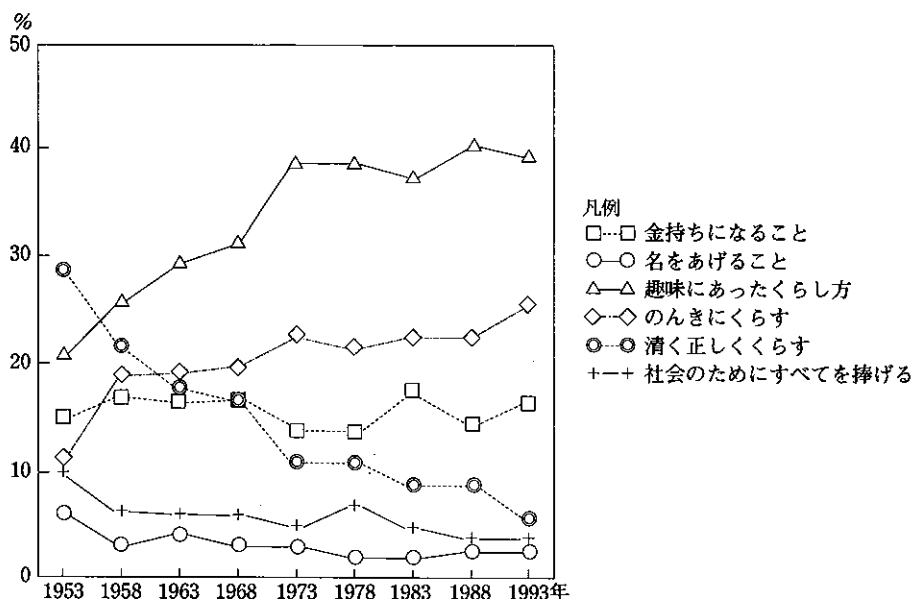
戦後の価値観についての要約的な論文の中で有末⁽¹⁵⁾が指摘しているのは、次の点である。すなわち、氏は、日本人の価値観について指摘され得る最近の方向性は、私生活主義、無限定主義および余暇生活の重視であり、これがどのような属性の中でも高まるとする。また、統計数理研究所の日本人の国民性調査⁽¹⁶⁾も意識の変容過程に関する興味深い結果を示している。すなわち、第1図は伝統的な家意識が後退していることを、また第2図は余暇志向が増大していることを、昭和30年代以降の殆ど一貫した傾向として示している。

同様の課題に関して、宮島⁽¹⁷⁾が「ある社会集団の成員に共有されている意識」としての社会意識の変動が次の諸事象によるとしている。すなわち、a. 農民層の減少、賃金生活



第1図 他人の子供を養子にするか

資料：日本人の国民性調査より作成。
出所：統計数理研究所〔24〕、57頁。



第2図 くらし方

資料：日本人の国民性調査より作成。
出所：統計数理研究所〔24〕，39頁。

者の増大など階級構造の変化，b. 都市への人口集中，c. 核家族化の急激な進行，d. 高等教育進学者の増大，e. 公害など「環境問題」の発生と住民運動の展開である⁽¹⁸⁾。帰結としてもたらされた私生活主義について「真の個的生活の実現の志向の希薄さ」が指摘され，また私生活享受型と私生活逃避型が区別されている⁽¹⁹⁾。

最近の「新しい世代」の意識の動向に関して，内藤⁽²⁰⁾は，C.ライクの提唱する「自己を起点とする」新しい意識が，日本でも見受けられるとし，こうした新しい意識をもつ青年たちの地域集団離れ，地域離れを指摘している。しかしまた，氏は，青年にとって地域が社会再生のための戦略的位置をとりうる可能性も示唆している。他に，最近の青年文化論の中でなされている，個人の情報セットの編集作業の結果としてのマイナー化の指摘が傾注される⁽²¹⁾。

このような，私的領域が拡大し重視されていく傾向が，農村地域住民においても見受けられるだろうか。

次の第3節以下では，滋賀県愛東町で実施した住民意識調査の結果を整理する。混住化と兼業化の進んだ地域社会の中において住民意識が全体としてどのような特徴を保有するものであるか，最近10年間にどのような変貌がみられたか，また世代の特徴がどのようなものとして把握されるかなどについて検討する。これを通じて農村地域住民の意識の最近の傾向について理解し，さらには農民意識研究の今日的課題が何であるかについて小括する。

注(1) 福武らが設定した4つの次元——家族，部落，村，国家——のそれぞれにおいて，意識の示され方が異なっていることが，その論拠とされた。福武・塚本〔12〕。後続する論争の中で着目される研究として，細谷〔6〕〔7〕，蓮見〔5〕などが挙げられる。同一のフィールドでの反復調査も行われており，農民意識の多元化が指摘されている。福武〔13〕，高橋ほか編〔23〕を参照。

(2) 井森〔15〕，第4章。

(3) 福武〔14〕，246～247頁。

- (4) 福武 [14], 38 頁。
- (5) 鈴木 [22], 469 頁。
- (6) 鈴木 [22], 466 頁。
- (7) 福武 [14], 229~230 頁。
- (8) 福武 [14], 40~41 頁。
- (9) 福武 [14], 253 頁。
- (10) 氏はまた、「家」と「村」を、「農民の意識にまつわる」「甲羅」であり、いまだ除去されていないとしている。福武 [14], 258 頁。
- (11) 城戸においても、「家族」とそれを包摂する「部落の秩序」が、日本人の伝統的な行動様式の淵源とされている。城戸浩太郎[17], 7 頁。
- (12) 補足として、歴史的な視野の中で農民騒擾に着目したユニークな農民意識の研究例を、挙げておく。布川清司 [9] [10] [11]。
- (13) Lukes [18]。
- (14) 浜口 [4], 133 頁。
- (15) 有末 [2]。
- (16) 統計数理研究所 [24]。
- (17) 宮島 [19], 126 頁。
- (18) 宮島 [19], 157 頁。
- (19) 宮島 [20], 192 頁。
- (20) 内藤 [21]。
- (21) 稲田 [16]。

3. 地域住民の意識変容

(1) 調査の概要

第1回調査は、1985（昭和60）年1月に、滋賀県愛東町I集落およびOa集落において、満18歳以上の全成員を対象として実施した。質問紙を用い、自計式による。有効回答数は551、有効回答率は79.3%である。性別にみると、男性が254人（46.1%）、女性が272人（49.4%）である。また、年齢階層別では、30歳代以下が218人（39.6%）、40~50歳代が182人（33.0%）、60歳代以上が128人（23.2%）である。主な職業別に回答者を捉え、農林業従事者（業主および家族従事者）が77人（14.0%）、農林業以外の自営業従事

者が49人（8.9%）、会社員（事務・サービス）が55人（10.0%）、会社員（工員・作業員）が124人（22.5%）、公務員・団体職員が41人（7.5%）、専業主婦・学生・無職が152人（27.6%）である。

第2回調査は、1995（平成7）年8月に、同町の同じ2つの集落において実施した。調査対象としたのは、満18歳以上の全成員である。質問紙を用い、自計式により実施した。有効回答数は511、有効回答率は69.5%である。性別にみると、男性は212人（41.5%）、女性は233人（45.6%）である。また、年齢階層別では30歳代以下が161人（31.5%）、40~50歳代が198人（38.7%）、60歳以上は

第1表 有効回答数および有効回答率

		有効 回答数	(母数)	有効 回答率(%)
1985年調査	計	551	(695)	79.3
	I 集落	338	(391)	86.5
	Oa 集落	213	(304)	70.1
1995年調査	計	511	(735)	69.5
	I 集落	331	(415)	79.8
	Oa 集落	180	(320)	56.3

資料：両年次住民意識調査による。

第2表 性別年齢階層別調査対象者数

(単位：人、()内は%)

	1985年	1995年
計	551(100.0)	511(100.0)
性別		
男性	254(46.1)	212(41.5)
女性	272(49.4)	233(45.6)
不明	25(4.5)	66(12.9)
年齢階層別		
18~29歳	94(17.1)	83(16.2)
30歳代	124(22.5)	78(15.3)
40歳代	100(18.1)	113(22.1)
50歳代	82(14.9)	85(16.6)
60歳代	69(12.5)	80(15.7)
70歳以上	59(10.7)	64(12.5)
不明	23(4.2)	8(1.6)

資料：両年次住民意識調査による。

144人(28.2%)である。職業階層別では、農林業従事者(業主および家族従事者)が64人(12.5%)、農林業以外の自営業従事者が43人(8.4%)、会社員(事務・サービス)が71人(13.9%)、会社員(工員・作業員)が117人(22.9%)、公務員・団体職員が45人(8.8%)、専業主婦・学生・無職が118人(23.1%)である。

なお、回答者中、農家の成員が341人(66.7%)、非農家の成員が156人(30.5%)となっている⁽¹⁾。(以上、第1～第4表。)

2度の調査時点における、調査対象となっ

た2集落の農家構成上の特徴は、次の通りである。すなわち、第1回調査時点において、I集落とOa集落の農家数の計154戸のうち、専業農家は11戸(7.1%)のみであり、他の143戸(92.9%)は兼業農家である。多くはII兼農家(127戸)であり、また雇用兼業が多い(125戸)。経営面積規模別にみると、1.0～2.0ha層の農家が64戸(41.6%)と多い。

第2回調査時点においては、2集落の農家数の計は、118戸に減少している。専業農家は、6戸(5.1%)であり、兼業農家は112戸

第3表 主な職業別調査対象者数

(単位:人, ()内は%)				
	1985年		1995年	
計	551 (100.0)		511 (100.0)	
農林業	77 (14.0)	除, 不明 (14.7)	64 (12.5)	除, 不明 (13.4)
他の自営業	49 (8.9)	(9.4)	43 (8.4)	(9.0)
会社員(事務・サービス)	55 (10.0)	(10.5)	71 (13.9)	(14.8)
会社員(工員・作業員)	124 (22.5)	(23.7)	117 (22.9)	(24.4)
公務員・団体職員	41 (7.5)	(7.8)	45 (8.8)	(9.4)
専業主婦・学生・無職	152 (27.6)	(29.1)	118 (23.1)	(24.6)
その他	25 (4.5)	(4.8)	21 (4.1)	(4.4)
不明	28 (5.1)		32 (6.3)	

資料:両年次住民意識調査による。

第4表 農家非農家別男女別回答者数

—— 1995年 ——

(単位:人, ()内は%)				
	計	男性	女性	不明
計	511 (100.0)	212	233	66
農家	341 (66.7)	146	146	49
非農家	156 (30.5)	62	82	12
不明	14 (2.7)	4	5	5

資料:1995年住民意識調査による。

第5表 農家構成の特徴

(単位：戸)

	総農家数	専業農家	兼業農家	兼業農家のうち				主業農家	準主業農家	副業的農家
				I兼農家	II兼農家	雇用兼業	自営兼業			
1985年 計	154	11	143	16	127	125	18			
I 集落	80	5	75	10	65	64	11			
Oa 集落	74	6	68	6	62	61	7			
1995年 計	118	6	112	7	105	98	14	8	28	82
I 集落	59	3	56	5	51	48	8	5	15	39
Oa 集落	59	3	56	2	54	50	6	3	13	43

資料：1985年農業集落カードおよび1995年農業センサス農家調査より作成。

第6表 経営耕地面積規模別農家数

(単位：戸)

	計	例外規定	0.1～ 0.3 ha	0.3～ 0.5 ha	0.5～ 1.0 ha	1.0～ 2.0 ha	2.0～ 3.0 ha	3.0～ 5.0 ha	5.0 ha 以上
1985年 計	154	1	26	13	30	64	13	6	1
I 集落	80	0	16	9	18	22	9	6	0
Oa 集落	74	1	10	4	12	42	4	0	1
1995年 計	118	0	12	6	23	57	14	3	3
I 集落	59	0	8	3	13	21	9	3	2
Oa 集落	59	0	4	3	10	36	5	0	1

資料：1985年農業集落カードおよび1995年農業センサス農家調査より作成。

である。多くはII兼農家(105戸)であり、雇用兼業が多い(98戸)。また、副業的農家が82戸と多い。経営面積規模別にみると、1985年時と同様に、1.0～2.0 ha層が57戸(48.3%)と多い。(以上、第5～第6表。)

町全体の特徴について、若干の補足をする。第1回調査が行われた1985年に、同町の農家率は59.8%であった。(調査対象となったI集落とOa集落のみの計では、77.8%。)1995年のデータはない。また、家族構成上の特徴として「核家族以外の親族世帯」が多く、第1回調査の行われた1985年に同町全体で55.0%、第2回調査の行われた1995年に54.5%である。なお、1995年の調査対象集落については世帯主夫婦とあかつぎの同居する

第7表 家族構成別農家数

(単位：戸)

	計	I 集落	Oa 集落
計	118	59	59
世帯主夫婦+同居あかつぎ	75	40	35
同居あかつぎ夫婦	27	15	12
あかつぎ単身	48	25	23
単身世帯主+同居あかつぎ	2	1	1
同居あかつぎ夫婦	0	0	0
あかつぎ単身	2	1	1
世帯主夫婦+その他の世帯員	28	10	18
世帯主夫婦のみ	8	5	3
単身世帯	1	0	1
その他	4	3	1

資料：1995年農業センサス農家調査による。

世帯が多いことが示されている(第7表)。(以上、農業センサスおよび国勢調査による。)

(2) 10 年間の変化

調査対象地域の住民意識を把握するにあたって、第1回調査から23、第2回調査については24の質問項目の回答結果を主要な検討対象とする。また、以下の分析を進めていくにあたって、これらの項目を、次の4つの領域に大別する。すなわち、A. 地域社会へのコミットメント、B. 生活価値観・生活拡充志向、C. 伝統的(家)意識、およびD. 社会貢献志向の4領域である。これらにもとづいて、2回の調査が行われた10年の間の、調査対象地域の住民の意識の動向を概観する⁽²⁾。

第1回調査において、回答者の7割以上が肯定し、かつ平均スコアが4.0以上の項目は、以下の通りである。すなわち、領域AのQ1とQ6、領域BのQ9、Q11およびQ15、領域DのQ24の計6項目で、領域Cには該当する項目がない。第2回調査において、同じ基準から、支持率の高い項目が以下のように

列挙される。すなわち、領域AのQ6、領域BのQ9、Q11およびQ15の4項目である。領域CとDには該当する項目がない。

両年間に変化が顕著であったのは次の諸項目である。すなわち、支持率において10ポイント以上の増加があったのは、領域AのQ3(付き合いは煩わしい)、領域BのQ20(婚期など気にせずやり通す)およびQ23(施設は近くに作ってほしくない)である。また、10ポイント以上の減少がみられたのは、領域AのQ5(募金や寄付は同じにすべき)、領域CのQ17(家系を絶やさず養子をとる)およびQ19(長男夫婦は親と暮らす)、領域DのQ22(施設のために役立ちたい)およびQ24(開発援助は大切である)である。以上は、全体として、調査対象地域の住民の意識における私的価値追求的な傾向がより顕著になってきたことを示している。換言すれば、慣行や伝統的な価値観、また社会貢献への志

第8表 単純集計結果の概要

		(単位: %)					
		1985 年			1995 年		
		思う	どちらともいえない	思わない	思う	どちらともいえない	思わない
Q 1	住んでいる町に愛着がある	81.3	11.5	7.2	73.4	14.2	12.4
Q 2	住んでいる集落に愛着がある	(調	査	せ	71.3	14.7	14.0
Q 3	付き合いは煩わしい	17.5	18.6	63.9	29.5	28.9	41.5
Q 4	行事に参加したくない	19.0	16.4	64.7	24.7	21.0	54.3
Q 5	募金や寄付は同じにすべき	51.7	16.4	31.9	39.9	21.8	38.3
Q 6	公害の反対運動に参加したい	82.7	10.9	6.4	82.3	10.4	7.3
Q 7	人に喜ばれることをしたい	51.3	29.6	19.0	42.5	37.3	20.1
Q 8	社会に役立ちたい	73.0	17.3	9.8	65.1	24.4	10.6
Q 9	個性を発揮できる生き方を	75.7	12.2	12.1	76.4	14.4	9.3
Q10	物質的に豊かなことが大切	45.1	17.5	37.3	53.1	23.1	23.7
Q11	生きがいをもつことが大切	93.1	4.7	2.2	94.3	5.3	0.4
Q12	自由な時間は学ぶことに	61.0	20.9	18.0	60.1	22.5	17.4
Q13	自由な時間は稼ぐことに	18.8	27.1	54.2	16.6	25.4	58.0
Q14	自由な時間は役立つことに	28.2	40.4	31.4	28.2	39.7	32.1
Q15	自由な時間は気晴らしに	84.5	8.1	7.3	84.4	10.5	5.0
Q16	土地を末長く守ること	65.0	20.4	14.6	58.5	22.0	19.6
Q17	家系を絶やさず養子をとる	58.2	26.6	15.2	34.4	35.7	29.9
Q18	大事なことは親兄弟に従う	23.5	25.4	51.1	16.9	28.8	54.3
Q19	長男夫婦は親と暮らす	59.4	21.3	19.2	41.5	32.0	26.6
Q20	婚期など気にせずやり通す	28.0	34.5	37.4	38.5	34.6	26.9
Q21	グループ活動は大切	74.0	19.3	6.6	67.7	18.8	13.5
Q22	施設のために役立ちたい	60.5	23.8	15.6	36.8	42.9	20.3
Q23	施設は近くに作ってほしくない	20.2	31.3	48.5	49.3	40.8	9.8
Q24	開発援助は大切である	79.5	18.2	2.4	65.7	24.4	9.9

資料：両年次住民意識調査による。

注(1) 無回答のサンプルについては掲表していない、N=294(1985年)および306(1995年)である。

(2) 思うは「全くそう思う」と「まあそうだと思う」の計、思わないは「あまりそうは思わない」と「思わない」の計である。

第9表 スコアの平均値と標準偏差

		1985 年		1995 年	
		平均 スコア	標準 偏差	平均 スコア	標準 偏差
Q 1	住んでいる町に愛着がある	4.16	0.9350	3.85	1.1207
Q 2	住んでいる集落に愛着がある	(調 査 せ ず)		3.78	1.1436
Q 3	付き合いは煩わしい	2.24	1.2260	3.10	1.1772
Q 4	行事に参加したくない	2.27	1.2258	3.37	1.2100
Q 5	募金や寄付は同じにすべき	3.26	1.2650	2.92	1.2144
Q 6	公害の反対運動に参加したい	4.37	0.9029	4.19	0.9426
Q 7	人に喜ばれることをしたい	3.44	1.0842	3.28	1.0039
Q 8	社会に役立ちたい	3.95	0.8613	3.76	0.9181
Q 9	個性を発揮できる生き方を	4.01	0.9705	4.03	0.9300
Q 10	物質的に豊かなことが大切	3.07	1.2566	3.44	1.1385
Q 11	生きがいをもつことが大切	4.42	0.7655	4.42	0.6384
Q 12	自由な時間は学ぶことに	3.75	1.1281	3.59	1.0498
Q 13	自由な時間は稼ぐことに	2.39	1.0418	2.42	1.0565
Q 14	自由な時間は役立つことに	2.98	0.9929	2.90	0.9816
Q 15	自由な時間は気晴らしに	4.14	0.8370	4.16	0.8148
Q 16	土地を末長く守ること	3.69	1.1220	3.49	1.1314
Q 17	家系を絶やさず養子をとる	3.57	1.0578	2.94	1.0713
Q 18	大事なことは親兄弟に従う	2.55	1.1459	2.38	1.1018
Q 19	長男夫婦は親と暮らす	3.51	1.1107	3.02	1.1692
Q 20	婚期など気にせずやり通す	2.90	1.1087	3.23	1.0954
Q 21	グループ活動は大切	3.89	0.7611	3.67	1.0103
Q 22	施設のために役立ちたい	3.56	0.9988	3.23	0.8843
Q 23	施設は近くに作ってほしい	2.52	1.1646	3.56	0.9535
Q 24	開発援助は大切である	4.03	0.7099	3.73	0.9054

資料：両年次住民意識調査による。

注(1) 第8表と同じ。

(2) スコアの与え方は、「全くそう思う」=5, 「まあそうだと思う」=4, 「どちらともいえない」=3, 「あまりそうは思わない」=2, 「思わない」=1である。

向がさほど強く支持されなくなる方向性が示されている。

ただし、全体的に支持率が変わらず高い項目があわせて着目されてよい。すなわち、Q6(領域A)、Q9、Q11、Q15(以上、領域B)の4項目については両年間を通じて支持率が7割を、また平均スコアが4.0を超えていた。これらの項目はいずれも一般的な生活価値観に関わっており、地域の環境保全、個性や精神的な価値、および余暇を重視する志向性を示している。(以上、第8～第9表。)

以上により、住民意識の特徴と10年間の変化として以下のような要約が可能となる。すなわち、調査対象となった地域定住民は、基本的には自分たちの住む地域の環境を重視し、また個性や精神的な価値および余暇を重視する傾向を意識に関わる全体的な特徴として有している。しかし、2回の調査が行われた1985年と95年の間に、住民の意識は若干

の変化を経験している。調査対象住民は、10年の間に地域内の伝統的な価値観への同調や社会貢献志向をやや低下させている。また、私的価値追求的な傾向を顕在化させつつある。

同じ23(1985年調査)ないし24(1995年調査)の項目について、因子分析を施した結果を付け加える。両年次とも、第一因子は伝統的価値に同調し、社会貢献に志向する項目群より成る。私的価値を重視したり擁護する志向に関しては、同様に両年間とも第五因子を構成するにすぎない。ただし、第一因子について、第1回調査において負の値を示していたQ3およびQ4の因子負荷量が第2回調査結果において正の値に転換しており、また第2回調査結果において個性的活動を重視する志向が第二因子を構成していることから、先の要約は、この10年間の意識の変化から大きく乖離するものではないといえよう。(第10～第11表を参照。)

第10表 因子分析の結果(1)——1985年——

	第一因子 伝統的価値 同調・社会 貢献志向	第二因子 社会的活動 重視志向	第三因子 (没個性 的・現状肯 定の志向)	第四因子 現状肯定的 (・活動的) 志向	第五因子 私的価値重 視志向
Q 1 住んでいる町に愛着がある	.573	-.093	.409	.083	.088
Q 2 住んでいる集落に愛着がある	(	調	査	す	)
Q 3 付き合いは煩わしい	-.357	-.094	-.502	-.331	.384
Q 4 行事に参加したくない	-.492	-.302	-.315	-.351	-.099
Q 5 募金や寄付は同じにすべき	.278	-.197	-.017	-.501	-.054
Q 6 公害の反対運動に参加したい	.289	.342	-.208	-.125	.476
Q 7 人に喜ばれることをしたい	.493	.181	-.132	-.020	-.225
Q 8 社会に役立ちたい	.557	.429	-.176	-.070	-.074
Q 9 個性を発揮できる生き方を	.221	.259	-.471	-.146	-.226
Q 10 物質的に豊かなことが大切	.209	-.461	-.358	.102	-.096
Q 11 生きがいをもつことが大切	.490	.177	.038	.137	.071
Q 12 自由な時間は学ぶことに	.376	.037	-.485	.207	-.014
Q 13 自由な時間は稼ぐことに	.227	-.424	-.415	.429	.038
Q 14 自由な時間は役立つことに	.556	-.041	-.360	.284	.103
Q 15 自由な時間は気晴らしに	.033	.021	-.103	-.517	.301
Q 16 土地を末長く守ること	.556	-.344	.082	-.249	.105
Q 17 家系を絶やさず養子をとる	.600	-.424	.165	-.113	-.061
Q 18 大事なことは親兄弟に従う	.364	-.617	.011	.037	-.211
Q 19 長男夫婦は親と暮らす	.478	-.447	.108	-.228	.045
Q 20 婚期など気にせずやり通す	-.320	.039	-.446	.194	-.163
Q 21 グループ活動は大切	.502	.455	.139	.072	.176
Q 22 施設のために役立ちたい	.553	.301	-.144	-.056	.064
Q 23 施設は近くに作ってほしくない	-.025	-.365	-.051	.100	.521
Q 24 開発援助は大切である	.250	.188	-.134	-.501	-.390

資料：1985年住民意識調査による。

注(1) N=294である。

(2) 掲表した数値は因子負荷量である。

第11表 因子分析の結果(2)——1995年——

	第一因子 伝統的価値 同調・社会 貢献志向	第二因子 (個性的)活 動重視志向	第三因子 物質的価値 重視志向	第四因子 社会的貢献 志向	第五因子 現状肯定 的・私的価 値擁護志向
Q 1 住んでいる町に愛着がある	.732	-.228	-.290	-.007	-.172
Q 2 住んでいる集落に愛着がある	.739	-.255	-.305	.062	-.207
Q 3 付き合いは煩わしい	.309	-.109	-.589	-.063	-.065
Q 4 行事に参加したくない	.353	-.039	-.623	-.039	-.083
Q 5 募金や寄付は同じにすべき	.208	-.198	.307	.034	.652
Q 6 公害の反対運動に参加したい	.336	.299	.082	-.294	.256
Q 7 人に喜ばれることをしたい	.454	.424	.137	.243	.218
Q 8 社会に役立ちたい	.603	.500	-.059	.075	.094
Q 9 個性を発揮できる生き方を	.338	.600	.063	-.009	-.106
Q 10 物質的に豊かなことが大切	.172	-.190	.553	-.354	-.041
Q 11 生きがいをもつことが大切	.290	.467	.053	-.560	-.006
Q 12 自由な時間は学ぶことに	.413	.462	.063	-.155	-.112
Q 13 自由な時間は稼ぐことに	.209	-.014	.424	.231	-.265
Q 14 自由な時間は役立つことに	.551	.217	.246	.450	.019
Q 15 自由な時間は気晴らしに	-.037	.330	.182	-.595	-.244
Q 16 土地を末長く守ること	.600	-.455	.167	-.119	-.006
Q 17 家系を絶やさず養子をとる	.559	-.468	.213	-.098	.078
Q 18 大事なことは親兄弟に従う	.406	-.543	.257	-.031	-.099
Q 19 長男夫婦は親と暮らす	.546	-.549	.114	-.086	.091
Q 20 婚期など気にせずやり通す	-.088	.263	.234	.204	-.307
Q 21 グループ活動は大切	.594	-.012	-.202	-.167	.115
Q 22 施設のために役立ちたい	.535	.270	.103	.291	.016
Q 23 施設は近くに作ってほしくない	-.086	.219	-.275	-.063	.597
Q 24 開発援助は大切である	.423	.491	.056	.097	-.058

資料：1995年住民意識調査による。

注(1) N=306である。

(2) 掲表した数値は因子負荷量である。

(3) 世代と意識、職業と意識

ところで、こうした意識の担い手として着目されるのは、基本的には世代である。両年次間において、多くの項目で年齢階層に応じた支持率の傾向的な相違が示されている。詳細については省略するが、年齢階層と意識の間の正の相関は、領域 A の Q 1, Q 2(95 年の $v=.246$)、Q 5(85 年の $v=.200$)、領域 B の Q 10 (95 年の $v=.216$)、Q 14、領域 C の Q 16 (95 年の $v=.232$)、Q 17 (85 年の $v=.223$, 95 年の $v=.339$)、Q 18 (85 年の $v=.233$, 95 年の $v=.247$)、Q 19 (95 年の $v=.301$)、領域 D の Q 21 (95 年の $v=.206$) において認められる。負の相関は、領域 A の Q 4(95 年の $v=.210$)、領域 B の Q 9, Q 15, Q 20、領域 D の Q 24 において認められる。(以上、第 12 表および第 14 表を参照。)

職業別にみて特徴的に位置づけられるのは、基本的には農林業従事者のみである。詳細については同様に省略するが、領域 A の Q 1, Q 2 (95 年のみ)、Q 5 (85 年)、領域 B の Q 7 (95 年)、Q 10 (95 年)、Q 14、領域 C の Q 16, Q 17(95 年の $v=.224$)、Q 18(95 年の $v=.202$)、Q 19 (95 年の $v=.218$) および領域 D の Q 22, Q 23 において、この職業カテゴリーの支持率が(相対的にはあるが、顕著に)高いことを確認しておく⁽³⁾。(以上、第 13 表および第 14 表を参照。)

以上を要約すると、4 つに大別した、意識に関する質問項目群の中で、領域 A (Q 1, Q 2, Q 5) および領域 C を中心として、地域社会と家に関わる意識の伝統性を示す項目において、高年齢層——男性の農林業従事者が多数を占める——の支持率が高い。また、領域 B, すなわち、個性重視的であるという点

第 12 表 年齢階層別支持回答者割合

(単位: %)

		1985 年						1995 年					
		18~29 歳	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上	18~29 歳	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
Q 1	住んでいる町に愛着がある	68.9	76.5	77.8	86.5	94.0	91.2	66.7	53.3	73.2	78.9	82.3	89.1
Q 2	住んでいる集落に愛着がある	(調 査 せ ず)						57.3	46.8	70.5	79.7	84.8	93.6
Q 3	付き合いは煩わしい	23.4	17.1	13.4	19.7	10.5	17.8	27.6	38.2	21.6	27.9	35.7	26.3
Q 4	行事に参加したくない	27.2	20.9	9.3	25.4	14.1	13.0	40.7	27.6	16.5	18.0	25.0	21.0
Q 5	募金や寄付は同じにすべき	45.6	42.9	46.8	58.2	69.2	62.9	38.7	26.7	30.0	36.6	53.3	60.3
Q 6	公害の反対運動に参加したい	75.8	88.1	86.5	78.4	89.4	72.3	70.2	78.0	88.3	89.8	88.3	75.4
Q 7	人に喜ばれることをしたい	49.5	38.4	47.9	62.5	56.9	61.8	33.8	29.4	40.4	43.0	61.5	48.3
Q 8	社会に役立ちたい	75.0	68.0	74.2	76.2	75.8	71.2	67.9	58.5	65.5	68.3	74.3	51.8
Q 9	個性を発揮できる生き方を	89.3	79.8	68.4	72.4	69.3	73.4	87.5	75.4	73.2	77.4	81.4	62.7
Q 10	物質的に豊かなことが大切	34.1	33.7	46.9	55.0	58.4	48.1	45.7	35.1	41.6	65.4	68.9	74.6
Q 11	生きがいをもつことが大切	91.3	91.9	93.9	91.2	97.1	96.5	94.0	93.6	94.7	95.3	96.2	95.1
Q 12	自由な時間は学ぶことに	59.4	69.6	58.9	60.0	60.0	50.0	57.6	57.9	55.8	65.5	64.5	64.9
Q 13	自由な時間は稼ぐことに	17.4	12.7	11.4	23.7	29.7	19.6	25.9	3.9	9.8	18.5	25.0	20.8
Q 14	自由な時間は役立つことに	11.4	22.2	27.6	45.3	34.9	35.5	21.7	11.5	21.3	31.8	38.8	32.8
Q 15	自由な時間は気晴らしに	95.6	85.3	77.9	83.7	87.3	80.3	91.4	87.2	81.4	82.5	83.4	78.9
Q 16	土地を末長く守ること	57.2	58.5	59.7	68.3	78.8	70.3	54.6	35.1	48.3	70.5	69.7	83.3
Q 17	家系を絶やさず養子をとる	42.5	41.9	55.7	70.9	82.9	72.2	22.3	9.5	16.3	49.4	57.9	69.8
Q 18	大事なことは親兄弟に従う	12.0	9.2	22.3	42.4	28.6	32.7	9.0	5.2	7.3	23.4	23.0	40.3
Q 19	長男夫婦は親と暮らす	46.2	49.6	59.2	68.4	71.9	73.7	30.8	13.0	29.2	48.8	63.5	74.2
Q 20	婚期など気にせずやり通す	33.7	33.0	21.9	26.6	22.9	24.6	53.4	42.2	36.9	38.0	30.6	28.9
Q 21	グループ活動は大切	75.0	76.7	75.2	66.7	73.9	73.6	60.8	46.8	69.7	80.0	68.3	85.0
Q 22	施設のために役立ちたい	61.3	54.9	57.0	75.7	59.0	61.7	31.6	27.7	32.4	31.1	56.1	50.0
Q 23	施設は近くに作ってほしくない	10.8	15.7	13.5	31.5	28.1	37.5	4.1	5.4	12.4	11.2	11.5	16.3
Q 24	開発援助は大切である	89.1	80.0	72.8	80.0	76.9	78.2	71.6	62.8	67.9	55.2	64.8	70.2

資料: 両年次住民意識調査による。

注. 掲表したデータは、「全くそう思う」と「まあそうだと思う」の計である。

第13表 職業分類別支持回答者割合

(単位: %)

		1985年						1995年					
		農 林 業	他 の 自 営 業	事 務 ・ サ ー ビ ス	工 作 ・ 業 員	公 団 体 職 員	専 業 ・ 学 生 ・ 無 職	農 林 業	他 の 自 営 業	事 務 ・ サ ー ビ ス	工 作 ・ 業 員	公 団 体 職 員	専 業 ・ 学 生 ・ 無 職
Q 1	住んでいる町に愛着がある	90.8	77.5	76.5	79.3	80.5	81.0	89.0	67.4	66.2	74.2	64.5	77.1
Q 2	住んでいる集落に愛着がある	(調査せず)	(調査せず)	(調査せず)	(調査せず)	(調査せず)	(調査せず)	93.8	65.1	66.6	67.8	64.4	74.4
Q 3	付き合いは煩わしい	17.3	8.4	18.5	16.7	29.3	14.9	34.5	29.3	31.4	27.7	28.9	23.6
Q 4	行事に参加したくない	15.1	4.2	27.8	18.6	29.3	17.7	17.4	26.8	29.0	24.5	18.2	24.6
Q 5	募金や寄付は同じにすべき	66.2	47.9	50.0	53.4	41.1	48.2	45.9	34.9	39.1	33.3	27.9	45.9
Q 6	公害の反対運動に参加したい	87.5	87.5	75.5	83.5	92.7	79.3	88.8	83.4	82.1	84.0	79.5	77.2
Q 7	人に喜ばれることをしたい	61.6	62.6	33.9	50.0	41.5	45.9	56.5	45.2	38.8	35.5	43.1	42.2
Q 8	社会に役立ちたい	73.2	87.5	76.0	69.6	82.5	66.2	73.2	72.1	72.1	59.6	75.6	57.4
Q 9	個性を発揮できる生き方を	80.8	73.5	80.8	75.2	70.8	76.6	82.2	81.4	74.2	73.8	90.9	71.7
Q 10	物質的に豊かなことが大切	50.0	25.0	32.8	53.0	39.1	45.5	70.0	53.6	41.4	51.8	28.8	63.4
Q 11	生きがいをもつことが大切	97.4	95.9	92.6	91.0	85.0	94.6	100.0	92.6	97.2	90.6	95.6	96.5
Q 12	自由な時間は学ぶことに	68.4	53.1	69.3	54.1	73.1	61.0	78.3	62.8	65.7	49.5	77.7	51.4
Q 13	自由な時間は稼ぐことに	22.9	14.2	7.7	20.8	7.5	18.3	31.6	4.6	11.3	15.6	8.9	18.9
Q 14	自由な時間は役立つことに	50.0	17.4	18.9	22.3	26.8	28.4	37.5	27.9	24.0	17.1	31.1	25.4
Q 15	自由な時間は気晴らしに	85.9	87.3	94.3	87.0	85.3	81.9	81.9	85.7	85.9	89.5	80.0	83.0
Q 16	土地を末長く守ること	74.3	58.3	50.9	66.6	58.6	65.8	85.2	41.9	48.5	57.3	54.6	59.4
Q 17	家系を絶やさず養子をとる	80.5	53.1	55.8	53.0	48.8	56.1	63.0	22.0	20.3	37.9	14.0	37.4
Q 18	大事なことは親兄弟に従う	34.7	20.8	15.1	23.6	2.5	21.0	29.0	7.2	7.5	17.1	2.4	20.7
Q 19	長男夫婦は親と暮らす	70.3	63.3	51.0	66.1	47.5	53.2	68.3	25.6	22.8	39.7	38.1	45.9
Q 20	婚姻など気にせずやり通す	21.9	25.1	21.5	22.7	45.0	30.8	28.9	48.9	38.5	39.8	45.0	36.0
Q 21	グループ活動は大切	75.7	70.8	79.3	70.3	85.4	72.0	77.4	58.1	63.8	69.9	72.7	70.6
Q 22	施設のために役立ちたい	69.6	72.7	47.2	54.6	77.5	59.5	58.2	41.5	36.2	26.2	44.2	37.8
Q 23	施設は近くに作ってほしくない	38.8	25.0	16.0	12.1	15.4	20.9	9.6	21.9	7.2	9.3	5.0	9.6
Q 24	開発援助は大切である	75.0	70.2	87.1	74.2	90.3	83.5	58.7	60.5	69.2	70.3	62.8	67.7

資料: 両年次住民意識調査による。

注. 第12表と同じ。

第14表 集計結果の概要(クラマーの係数と有意差の検定結果)

		性別		年齢階層別		職業分類別	
		1985年	'95年	1985年	'95年	1985年	'95年
Q 1	住んでいる町に愛着がある	.093	.097	.159**	.184***	.100	.133
Q 2	住んでいる集落に愛着がある	(調査せず)	.117	(調査せず)	.246***	(調査せず)	.154*
Q 3	付き合いは煩わしい	.086	.059	.172***	.207***	.151*	.118
Q 4	行事に参加したくない	.044	.048	.153**	.210***	.161**	.133
Q 5	募金や寄付は同じにすべき	.033	.058	.200***	.179***	.106	.132
Q 6	公害の反対運動に参加したい	.094	.053	.131**	.185***	.117	.093
Q 7	人に喜ばれることをしたい	.100	.065	.140*	.174**	.129	.122
Q 8	社会に役立ちたい	.104	.069	.086	.140*	.125	.130
Q 9	個性を発揮できる生き方を	.063	.087	.153**	.172**	.093	.127
Q 10	物質的に豊かなことが大切	.035	.128*	.149*	.216***	.180***	.182**
Q 11	生きがいをもつことが大切	.118*	.062	.100	.081	.124	.114
Q 12	自由な時間は学ぶことに	.049	.056	.100	.089	.108	.178**
Q 13	自由な時間は稼ぐことに	.050	.098	.142*	.182***	.126	.152*
Q 14	自由な時間は役立つことに	.050	.077	.193***	.177**	.175**	.143
Q 15	自由な時間は気晴らしに	.094	.088	.134	.145*	.092	.087
Q 16	土地を末長く守ること	.113*	.043	.157**	.232***	.142*	.193***
Q 17	家系を絶やさず養子をとる	.012	.069	.223***	.339***	.147*	.224***
Q 18	大事なことは親兄弟に従う	.026	.056	.233***	.247***	.159**	.202***
Q 19	長男夫婦は親と暮らす	.019	.067	.160**	.301***	.139*	.218***
Q 20	婚姻など気にせずやり通す	.055	.039	.119	.177**	.136	.092
Q 21	グループ活動は大切	.052	.055	.069	.206***	.077	.100
Q 22	施設のために役立ちたい	.017	.172**	.133	.175**	.142	.163*
Q 23	施設は近くに作ってほしくない	.048	.089	.184***	.110	.187***	.117
Q 24	開発援助は大切である	.054	.070	.107	.153*	.134	.113

資料: 両年次住民意識調査による。

注. 数値は、クラマーのコンティンジェンシー係数の平方根である。カイ2乗検定の結果を併せて示す。無印は有意差なし、*印は5%水準で有意、**印は1%水準で有意、***印は0.1%水準で有意である。

において非伝統的な生活価値観の示されている項目で、若い高齢層——男性では工員・作業員が、女性では専業主婦・学生・無職が多

い——の支持率が高い。このことは、基本的には両年次ともにおいて、共通して指摘される特徴である。(第15-1～2, および第16-

第15-1表 年齢階層別職業構成——1985年, 男性——

(単位: 人, 下段()内は%)

	計	農林業	他の 自営業	事務・ サービス	工員・ 作業員	公務員・ 団体職員	専業主 婦・学 生・無職	その他
計	251 (100.0)	47 (100.0)	34 (100.0)	33 (100.0)	81 (100.0)	25 (100.0)	21 (100.0)	10 (100.0)
18～29歳	45 (17.7)	— (—)	1 (2.9)	9 (27.3)	21 (25.9)	4 (16.0)	10 (47.7)	— (—)
30歳代	59 (23.5)	2 (4.3)	14 (41.2)	7 (21.2)	20 (24.7)	13 (52.0)	— (—)	3 (30.0)
40歳代	51 (20.3)	5 (10.6)	7 (20.6)	10 (30.3)	21 (25.9)	5 (20.0)	1 (4.8)	2 (20.0)
50歳代	40 (15.9)	10 (21.3)	6 (17.7)	6 (18.2)	14 (17.3)	2 (8.0)	1 (4.8)	1 (10.0)
60歳代	34 (13.5)	18 (38.3)	3 (8.8)	1 (3.0)	5 (6.2)	1 (4.0)	4 (19.0)	2 (20.0)
70歳以上	22 (8.8)	12 (25.5)	3 (8.8)	— (—)	— (—)	— (—)	5 (24.9)	2 (20.0)

資料: 1985年住民意識調査による。

第15-2表 年齢階層別職業構成——1985年, 女性——

(単位: 人, 下段()内は%)

	計	農林業	他の 自営業	事務・ サービス	工員・ 作業員	公務員・ 団体職員	専業主 婦・学 生・無職	その他
計	264 (100.0)	28 (100.0)	14 (100.0)	22 (100.0)	43 (100.0)	15 (100.0)	129 (100.0)	13 (100.0)
18～29歳	48 (18.1)	— (—)	3 (21.4)	13 (59.1)	5 (11.6)	3 (20.0)	21 (16.3)	3 (23.1)
30歳代	64 (24.2)	1 (3.6)	4 (28.6)	4 (18.2)	12 (27.9)	7 (46.7)	33 (25.6)	3 (23.1)
40歳代	46 (17.4)	3 (10.7)	4 (28.6)	5 (22.7)	19 (44.2)	2 (13.3)	11 (8.5)	2 (15.4)
50歳代	39 (14.8)	12 (42.9)	2 (14.3)	— (—)	5 (11.6)	3 (20.0)	17 (13.2)	— (—)
60歳代	34 (12.9)	9 (32.1)	1 (7.1)	— (—)	1 (2.3)	— (—)	20 (15.5)	3 (23.1)
70歳以上	33 (12.5)	3 (10.7)	— (—)	— (—)	1 (2.3)	— (—)	27 (20.9)	2 (15.4)

資料: 1985年住民意識調査による。

第 16-1 表 年齢階層別職業構成——1995 年, 男性——

(単位: 人, 下段()内は%)

	計	農林業	他 の 自営業	事 務 ・ サービス	工員 ・ 作業員	公務員 ・ 団体職員	専 業 主 婦 ・ 学 生 ・ 無職	その他
計	204 (100.0)	31 (100.0)	23 (100.0)	32 (100.0)	72 (100.0)	22 (100.0)	19 (100.0)	5 (100.0)
18~29 歳	38 (18.6)	— (—)	2 (8.7)	2 (6.3)	20 (27.8)	7 (31.8)	7 (36.8)	— (—)
30 歳代	32 (15.7)	— (—)	2 (8.7)	10 (31.3)	13 (18.1)	5 (22.7)	— (—)	2 (40.0)
40 歳代	52 (25.5)	3 (9.7)	11 (47.8)	11 (34.4)	19 (26.4)	6 (27.3)	1 (5.3)	1 (20.0)
50 歳代	37 (18.1)	4 (12.9)	4 (17.4)	7 (21.9)	16 (22.2)	3 (13.6)	3 (15.8)	— (—)
60 歳代	25 (12.3)	12 (38.7)	1 (4.3)	2 (6.3)	4 (5.6)	1 (4.5)	4 (21.1)	1 (20.0)
70 歳以上	20 (9.8)	12 (38.7)	3 (13.0)	— (—)	— (—)	— (—)	4 (21.1)	1 (20.0)

資料: 1995 年住民意識調査による。

第 16-2 表 年齢階層別職業構成——1995 年, 女性——

(単位: 人, 下段()内は%)

	計	農林業	他 の 自営業	事 務 ・ サービス	工員 ・ 作業員	公務員 ・ 団体職員	専 業 主 婦 ・ 学 生 ・ 無職	その他
計	217 (100.0)	19 (100.0)	15 (100.0)	34 (100.0)	32 (100.0)	19 (100.0)	86 (100.0)	12 (100.0)
18~29 歳	40 (18.4)	— (—)	— (—)	12 (35.3)	9 (28.2)	3 (15.8)	12 (14.0)	4 (33.3)
30 歳代	39 (18.0)	— (—)	3 (20.0)	9 (26.5)	4 (12.5)	6 (31.6)	14 (16.3)	3 (25.0)
40 歳代	52 (24.0)	2 (10.5)	8 (53.3)	10 (29.4)	14 (43.8)	7 (36.8)	8 (9.3)	3 (25.0)
50 歳代	30 (13.8)	5 (26.3)	1 (6.7)	2 (5.9)	4 (12.5)	3 (15.8)	13 (15.1)	2 (16.7)
60 歳代	30 (13.8)	9 (47.4)	3 (20.0)	— (—)	1 (3.2)	— (—)	17 (19.8)	— (—)
70 歳以上	26 (12.0)	3 (15.8)	— (—)	1 (2.9)	— (—)	— (—)	22 (25.6)	— (—)

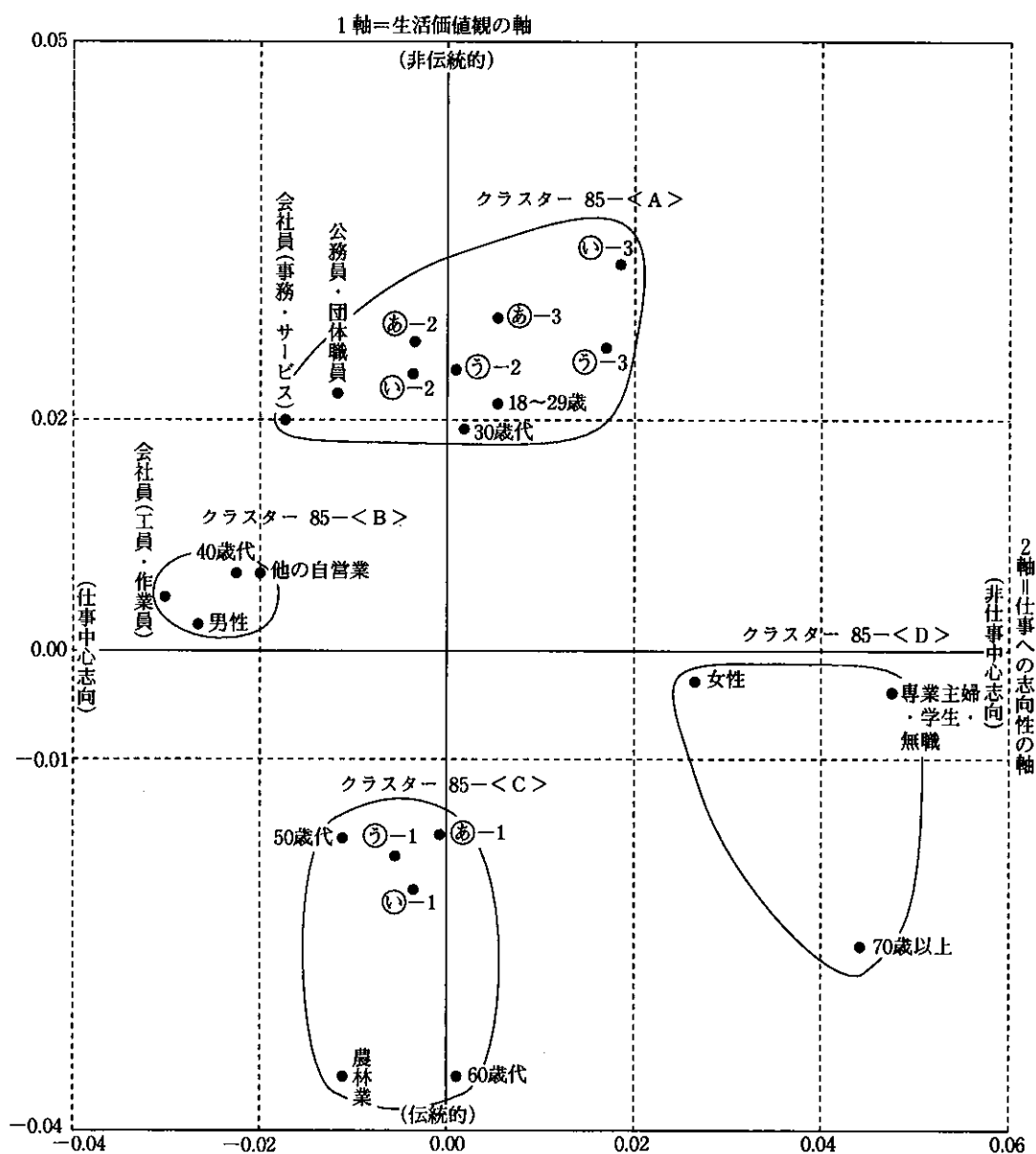
資料: 1995 年住民意識調査による。

1~2 表を参照。)

サンプルの特性の理解をもう少し進めるために, 第 3~4 図を参照したい。

1985 年調査のサンプルは, 生活価値観の軸と仕事への志向性の軸によって区切られた象元の中に 4 つのクラスターとして位置づけられる。すなわち, 1. クラスター 85-〈A〉は, 生活価値観における非伝統性によって特徴づけられ, 30 歳代以下の若年層と公務員・団体

職員および会社員(事務・サービス)が含まれる。2. クラスター 85-〈B〉は, 生活価値観においてやや非伝統的であり, また仕事中心志向であることによって特徴づけられる。40 歳代, 男性, 農林業以外の自営業および会社員(工員・作業員)がこれに含まれる。3. クラスター 85-〈C〉は, 伝統的な生活価値観によって特徴づけられる。50 歳代と 60 歳代, および農林業従事者が, これに含まれる。



第3図 サンプルの特性(1) — 1985年, 数量化Ⅲ類によるカテゴリースコア —

- 凡例 ⑥ 親から受け継いだ土地を持つ人は, その土地を末長く守っていかなければならない。(Q16)
 ① 子どもが一人もいない家では, 家系が絶えないように養子をとるのがよい。(Q17)
 ⑤ 長男夫婦は親と一緒に暮らすのがよい。(Q19)
 1 思う(「全くそう思う」と「まあそう思う」の計)
 2 どちらともいえない
 3 思わない(「あまりそうは思わない」と「思わない」の計)

資料: 1985年住民意識調査による。

4. クラスター 85-＜D＞は、生活価値観における伝統性・非仕事中心志向によって特徴づけられる。70 歳以上、女性、専業主婦・学生・無職のカテゴリーがこれに含まれる。以上の累積寄与率は 21.4%である。(第 3 図を参照。)

また、第 4 図は、1995 年調査の結果を生活価値観の軸と生活スタイルの軸によって区切られた象元の中に位置づけたものである。生活価値観の軸と生活スタイルの軸によって区切られた象元の中に、1995 年調査のサンプルは、4 つのクラスターをなして位置づけられる。すなわち、1. クラスター 95-＜A＞は、生活価値観における非伝統性と生活スタイル確立的な志向性によって特徴づけられ、地域社会や家に関する伝統的な意識を保有しないサンプルによって構成される。2. クラスター 95-＜B＞は、生活価値観においても生活スタイルにおいても中位に位置することによって特徴づけられ、50 歳代までの、農林業を除く

さまざまな職業をもつ男女のサンプルによって構成される。3. クラスター 95-＜C＞は、生活価値観においてやや非伝統性を示し、生活スタイル模索的であることによって特徴づけられる。家の継承に関する意識が中立的なサンプルによって構成される。4. クラスター 95-＜D＞は、生活価値観における伝統性と生活スタイル確立的な志向において特徴づけられる。60 歳以上の高年齢層と農林業従事者および直系制を支持するサンプルによって構成される。以上の累積寄与率は、18.5%である。

地域の将来像に関する追加的な質問の結果をみておく。地域がさらに豊かになるために何を望むかを尋ねた結果をまとめた第 17 表によれば、全体として医療施設の充実を望む回答が最多であり、また年齢階層が高いほど回答率が高い。次に多い交通の便の発達を望む回答については、18～29 歳層と 70 歳以上の回答率が高い。他に、18～29 歳および 30 歳代において、レクリエーションの機会が充実

第 17 表 地域がさらに豊かになるために何を求めるか

(単位：%)

	全体	年 齢 階 層 別					
		18 歳～ 29 歳	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
1) 交通の便がよくなること	62.7	71.4	61.1	60.9	54.9	56.6	72.9
2) 雇用機会がふえること	31.3	24.7	31.9	33.6	37.8	30.3	25.4
3) 買い物が便利になること	52.1	62.3	52.8	43.6	48.8	51.3	61.0
4) 医療施設が充実すること	71.0	59.7	66.7	70.9	73.2	76.3	84.7
5) レクリエーションの機会が充実すること	12.1	24.7	23.6	5.5	6.1	6.6	10.2
6) サークル・学習活動が充実すること	11.3	9.1	12.5	11.8	7.3	17.1	10.2
7) 住民の話し合いと交流の機会がふえること	21.5	20.8	8.3	23.6	29.3	26.3	16.9
8) その他	4.2	1.3	11.1	5.5	1.2	3.9	1.7

資料：1995 年調査による。

注(1) 回答形式は複数回答である。

(2) 年齢の不明な回答については、年齢階層別の集計から除外した。

第18表 将来農業にどのように取り組んでいくのがよいと考えるか

(単位：%)

	全体	農業従事の度合い別			年 齢 階 層 別		
		農業が主	農業が従	農業に従事せず	18歳～39歳	40歳～59歳	60歳以上
1)自分の家の土地は、自分たち家族で耕すのがよい	35.0	46.7	25.7	29.9	14.3	19.2	30.6
2)手のまわらない農地は、人に頼んで作ってもらうのがよい	49.2	46.7	45.7	49.8	31.7	27.8	29.9
3)集落で話し合って農業の仕方を考えていくのがよい	48.7	45.0	51.4	40.8	23.0	59.0	25.0
4)収益の上がる作目に取り組んでいくのがよい	18.8	25.0	40.0	14.4	11.2	12.1	10.4
5)農業は土地を荒らさないために行う	30.7	26.7	28.6	32.8	13.0	18.2	25.7
6)その他	1.9	—	—	3.0	2.5	0.5	0.7

資料：1995年住民意識調査による。

注(1) 回答形式は複数回答である。

(2) 就業形態の不明な農家成員については、農業従事の度合い別の集計から除外した。

(3) 年齢の不明な回答については、年齢階層別の集計から除外した。

することを望む回答が多くなっている。

第18表に、農家成員を対象を限定して農業への将来的な取り組み方について尋ねた結果を要約した。これによれば、作業委託をよしとする回答が最多である(49.2%)。次に多い回答は、集落での農業への取り組みをよしとするものであり(48.7%)、これについては40～59歳層の回答(59.0%)および農業を従とする回答者の回答が多い(51.4%)ことが着目される。また、「農業が主」の回答者について、家族による耕作をよしとする回答が多い(46.7%)点も着目される。

注(1) 1985年には調査しておらず、データはない。

(2) 以下に、質問文のリスト掲げる。表ではこれを略した文を用いる。

なお、質問文の番号に続く()内について、Aは地域社会へのコミットメント、Bは生活価値観・生活拡充志向、Cは伝統的(家)

意識、Dは社会貢献志向に関わる価値意識を抽出するための質問文群に属することを表す。

Q 1 (A)今住んでいる町に愛着がある。

Q 2 (A)今住んでいる集落に愛着がある。

Q 3 (A)隣近所との付き合いは煩わしい。

Q 4 (A)集落や村内の行事や活動にはなるべく参加したくない。

Q 5 (A)隣近所がする募金や寄付は、自分の家も同じにすべきである。

Q 6 (A)自分の住む地域に生活をおびやかすような公害問題がおこったら、反対運動に参加したい。

Q 7 (B)家族が多少反対しても、多くの人から喜ばれるようなことを進んでやりたい。

Q 8 (D)社会の一員として何か社会のために役立ちたい。

Q 9 (B)自分の個性を発揮できるような生き方をしたい。

Q 10 (B)生活をしていく上で何よりも大切なことは、食べ物や着る物、住まいなど物質的に豊かなことだと思う。

Q 11 (B)生活をしていく上で何よりも大切なことは、生きがいをもち、心にハリや安らぎのあることだと思う。

Q 12 (B)自由な時間は、何かを学んだり教養を高めたりすることに使いたい。

Q 13 (B)自由な時間は、働いてお金を稼ぐことに使いたい。

Q 14 (B)自由な時間は、社会に役立つことに使いたい。

Q 15 (B)自由な時間は、趣味や教養・気晴らしのために使いたい。

Q 16 (C)親から受け継いだ土地を持つ人は、その土地を末長く守っていかなければならない。

Q 17 (C)子どもが一人もいない家では、家系が絶えないように養子をとるのがよい。

Q 18 (C)進学や結婚など人生の大事なことを決めるのに本人と親兄弟との意見が対立したときは、最後は親兄弟の意見に従うべきだ。

Q 19 (C)長男夫婦は親と一緒に暮らすのがよい。

Q 20 (B)自分のやりたいことがあれば、婚期など気にせずやり通してよい。

Q 21 (D)地域の青年団、婦人会、老人会や趣味、スポーツなどのグループ活動は大切である。

Q 22 (D)社会福祉の施設(例えば、茗荷村など)のために自分も役に立ちたい。

Q 23 (D)社会福祉の施設(例えば、茗荷村など)は、自分の住む集落には作ってほしくない。

Q 24 (D)開発途上の国の人たちを援助したり協力したりすることは大切である。

(3) クラマーの係数 $v \geq .200$ の場合のみ、係数を記入した。 $v = \chi^2 / N (t - 1)$ 。N は母数、t は $s \times t$ 表におけるカテゴリーの数を示している。ただし、 $s < t$ 。

なお、性別との相関は殆ど認められなかった。

4. むすび

本稿で扱い得たデータは、一つの地域で実施した2回の質問紙調査の結果に限られているけれども、地域の環境を重視し、個性や精神的な価値および余暇を重視しながら、地域内の伝統的な価値観への同調や社会貢献志向をやや低下させている住民意識の全体的な特徴と、若年層および高齢の男子農林業従事者に代表される特徴ある意識の担い手が、把握された。

今後の課題として、農村地域住民の意識を研究する上で、以下の諸点が重視されるべきである。すなわち、a. 実態調査の対象を、単に農村地域住民あるいは農家成員としてではなく、基本的特性を十分に把握した上で適切に特徴づけたサンプルとして扱うこと、b. 把握すべき意識の領域と質問項目を整理すること、特に、伝統的な家意識や村意識、地域社会への貢献志向、また余暇志向の測定が可能となるようにすること、c. 混住化と兼業化の進展した農村地域社会における住民意識の特徴と変容過程についての解釈(仮説的な説明)をいくつか提起し、検討すること、である。

また、付け加えるならば、d. 日本人の社会意識研究の中に、旧来的な農民というカテゴリーや彼らのもつ意識がどう位置づけるのか、e. 農業に現在直接関与していない農家成員や居住地を農村社会に定める非農家の成員らが、農民意識あるいは農村地域住民の意識の研究の範疇にとり入れられてよいかが、やがて問われてよい。

小さな工夫にすぎないけれども、本研究では2回の質問紙調査の結果を検討するに際して、検討する意識の領域を伝統的な(家)意識にとどめず、生活価値観一般や社会貢献志向、地域社会へのコミットメントについて扱った。この4領域を構成する質問文群を用

いて、地域社会の中の多様な特性をもった人々が、どのような意識を保有しているのかについて問うていった。さらなる可能性として、より洗練された分析手法の導入について検討することが望まれる⁽¹⁾。

社会意識の研究の中に農村地域住民が適切に位置づけられ、農民がなお独特なカテゴリーとして認められるだろうか。あるいは現代社会において、農家の成員であったり農村地域社会の住民であることにより、意識の様態が規定されていないことが示されるだろうか。この点を、残された重要な課題として確認しておきたい。

注(1) 本稿で扱った愛東町を含む7つの地域で農家世帯員の意識を把握した相川の先行的な研究が着目される。家意識の把握を主目的とするものであるが、調査項目も充実しており、意識間の連関関係や意識の規定条件を重層的に捉えた研究である。相川〔1〕。

〔文 献〕

- 〔1〕 相川良彦「社会規範としての農民の家意識」(『農業総合研究』第41巻第2号, 1987年), 1~61頁。
- 〔2〕 有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化——余暇と自己実現を中心に——」(『法学研究』第67巻第12号, 1994年), 55~88頁。
- 〔3〕 東廉・川端(→石原)豊美「社会参加意識と生活価値観——滋賀県愛東町調査より——」(『総研月報』No.440, 1985年), 11~34頁。
- 〔4〕 浜口恵俊「日本人の連帯的自律性——間人主義と個人主義——」(浜口恵俊編『集団主義 日本らしさの原点 (現代のエスプリ No.160)』至文堂, 1980年), 127~140頁。
- 〔5〕 蓮見音彦「農民意識研究序説」(『経済と社会』創刊号, 1965年), 39~57頁。
- 〔6〕 細谷昂「農民意識の変容と停滞(上)」(『思想』No.457, 1962年), 48~69頁。
- 〔7〕 細谷昂「農民意識の変容と停滞(下)」(『思想』No.463, 1963年), 129~142頁。

- 〔8〕 細谷昂「農民意識と農村社会の変革」(蓮見音彦編『社会学講座4 農村社会学』東京大学出版会, 1973年), 191~218頁。
- 〔9〕 布川清司「近世日本の民衆倫理思想」(弘文堂, 1973年)。
- 〔10〕 布川清司「近世民衆の倫理的エネルギー」(風媒社, 1976年)。
- 〔11〕 布川清司「近世庶民の意識と生活」(農山漁村文化協会, 1984年)。
- 〔12〕 福武直・塚本哲人『日本農民の社会的性格』(有斐閣, 1954年)。
- 〔13〕 福武直『農村社会と農民意識』(有斐閣, 1972年)。
- 〔14〕 福武直『福武直著作集 第七集』(東京大学出版会, 1976年)。
- 〔15〕 井森陸平『農村社会学』(目黒書店, 1929年)。
- 〔16〕 稲田雅也「私だけのアンサンブル——マイナー志向と意味充実——」(今田高俊編『ハイパー・リアリティの世界』有斐閣, 1994年), 83~123頁。
- 〔17〕 城戸浩太郎『社会意識の構造』(新曜社, 1981年)。
- 〔18〕 Lukes, S. M. *Indivisualism*, Basil Blackwell, 1973. (間宏監訳『個人主義』御茶の水書房, 1981年)。
- 〔19〕 宮島喬「社会意識の変化——プライベート・タイゼーションとの関連で——」(寿里茂編『文化の変動』朝倉書店, 1980年), 123~167頁。
- 〔20〕 宮島喬『現代社会意識論』(日本評論社, 1983年)。
- 〔21〕 内藤辰美「地域と青年——新しい展開のために——」(高橋勇悦・内藤辰美編『青年の地域リアリティ感覚』恒星社厚生閣, 1990年), 7~37頁。
- 〔22〕 鈴木榮太郎『鈴木榮太郎著作集II』(未来社, 1968年)。
- 〔23〕 高橋明善・蓮見音彦・山本英治編『農村社会の変貌と農民意識』(東京大学出版会, 1992年)。
- 〔24〕 統計数理研究所『国民性の研究 (研究リポート75)』(1994年)。

〔謝辞〕

1985 年と 95 年の愛東町住民意識調査は、共に東廉氏（現、三重大学）と共同で実施した。本稿の作成については、筆者自身の観点

および分析にもとづいているが、途中、適切な助言を惜しなかったばかりか、このような形で共同調査研究の結果を発表することを了承された氏に、心より感謝する。

附表 1 調査項目間の相関係数(1985 年)

Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q 10	Q 11	Q 12	Q 13	Q 14	Q 15	Q 16	Q 17	Q 18	Q 19	Q 20	Q 21	Q 22	Q 23	Q 24
×		-.327	-.346	.154	.085	.188	.196	-.020	.060	.261	.055	.015	.188	-.248	.250	.353	.212	.341	-.258	.255	.186	.047	-.008
	Q 3		.394	.066	.074	-.204	-.157	.030	.025	-.198	.047	.045	-.063	.136	-.076	-.212	-.155	.086	.126	-.195	-.074	.089	-.214
	Q 4			.038	-.169	-.116	-.285	.007	-.021	-.290	.092	.013	-.199	.073	-.120	-.184	.017	-.062	.118	-.340	-.288	.054	-.007
	Q 5				.084	.115	.112	-.013	.085	.041	.065	-.021	.076	.088	.252	.196	.194	.180	-.130	.015	.067	-.037	.180
	Q 6					.100	.273	.145	.017	.156	.132	.015	.143	.166	.111	.014	.137	.045	.014	.236	.223	.030	.060
		Q 7					.447	.163	.031	.120	.151	.068	.235	.034	.191	.169	.099	.112	-.009	.255	.231	.019	.127
		Q 8						.245	.022	.264	.202	-.071	.346	.052	.101	.101	-.022	.104	-.076	.315	.349	-.084	.226
		Q 9							.086	.097	.148	.085	.131	.062	.033	-.014	-.083	.066	.099	.126	.207	-.094	.228
		Q 10								.073	.161	.303	.133	.049	.218	.222	.235	.203	.164	-.142	-.039	.083	-.018
		Q 11									.240	.088	.197	.041	.180	.231	.021	.077	.176	.223	.161	.067	.080
		Q 12										.205	.382	-.021	.074	.132	.138	.027	.016	.105	.252	-.070	.053
		Q 13											.329	-.168	.159	.170	.285	.108	.042	-.051	.102	.161	-.106
		Q 14												-.045	.174	.192	.267	.169	-.067	.241	.286	.088	.054
		Q 15													.043	.036	-.006	.052	-.026	-.014	.077	.086	.101
		Q 16														.501	.250	.395	.239	.190	.187	.058	.116
		Q 17															.391	.422	-.199	.105	.199	.075	.138
		Q 18																.367	-.134	-.070	.052	.096	.019
		Q 19																	.184	.039	.141	.120	.073
		Q 20																		-.158	-.159	.045	-.056
		Q 21																			.379	-.073	.127
		Q 22																				-.148	.180
		Q 23																					-.121

資料：1985 年住民意識調査結果より作成。

注。質問 2 は 1985 年の調査項目に含まれておらず、×印とした。

附表 2 調査項目間の相関係数(1995 年)

	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q 10	Q 11	Q 12	Q 13	Q 14	Q 15	Q 16	Q 17	Q 18	Q 19	Q 20	Q 21	Q 22	Q 23	Q 24
Q 1	.910																							
Q 2	.312	.910																						
Q 3	.437	.033	.910																					
Q 4	.099	-.024	.031	.910																				
Q 5	.060	.111	.047	.068	.910																			
Q 6	.308	.306	.484	.280	.002	.910																		
Q 7	.553	-.067	.285	.433	.058	.410	.910																	
Q 8	.330	.360	.089	.269	.129	-.050	.061	.910																
Q 9	.110	.033	.207	.084	.138	.239	.235	.222	.152	.014	.079	.026	.155	.026										
Q 10	.408	.009	.062	.303	.037	.058	-.049	-.053	.061	.236	.166	.116	.250	.284										
Q 11	.109	.335	.168	.095	.058	-.028	-.008	.020	.136	.262	-.007	.284	.142	.142										
Q 12	.294	-.020	.070	.165	.178	.119	.030	-.001	.092	-.137	.142	.142	.142	.142										
Q 13	-.087	.189	.179	.136	.124	.016	.201	.458	-.079	.294	.155	.032	.002	.028										
Q 14	-.073	.091	.107	.147	.133	.003	.003	.019	.042	.155	.032	.002	.028	.014										
Q 15	-.029	.283	.221	.130	.032	.002	.028	.014	.079	.026	.155	.026	.116	.250										
Q 16	.440	.611	.081	.213	.152	-.043	-.002	.124	.221	.028	.014	.014	.014	.014										
Q 17	.519	-.070	.169	.124	-.221	-.028	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 18	.195	.268	.111	-.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 19	.072	.077	.001	.178	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 20	.335	.008	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 21	.072	.077	.001	.178	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 22	.335	.008	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 23	.072	.077	.001	.178	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014										
Q 24	.335	.008	.248	.361	.111	.094	-.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014	.014										

資料：1995 年住民意識調査結果より作成。

附表3 クラスター分析の結果の要約

	A. 地域社会への コミットメント	B. 生活価値観・ 生活拡充志向	C. 伝 統 的 (家)意識	D. 社会貢献 志 向
1985 年				
クラスター 85-1	6	7, 11, 12, 13, 14		8, 21, 22
クラスター 85-2	1		16, 17, 18, 19	
その他	3, 4, 5	9, 10, 15, 20		23, 24
1995 年				
クラスター 95-1		7, 9, 12, 13, 14		8, 22, 24
クラスター 95-2	1, 2		16, 17, 18, 19	21
その他	3, 4, 5, 6	10, 11, 15, 20		23

注(1) 両年次とも、全サンプルについてのクラスター分析の結果である。(クラスター数=10)

(2) 表中の1～24は、両年次調査の質問項目の番号である。

(3) 第3図および第4図中のクラスター名とは無関係である。